



▲規定 純潔清新なる
短篇小説を望む、凡て振
假名つき二十四字詰八
十行以内とす、用紙は半
紙又は罫紙を用ゐ一人
一篇を限りとす、締切は
毎月十五日、懸賞品は甲
種規定に據る。

二 等 〇 發 明 家

岩代國 須賀川 服部 貞子

私が以前、郷里から三里ばかり離れた或る田舎町の
小學校に奉職して居た頃、野澤といふ家の二階の六疊
を貸りて自炊して居た。

野澤の家内は、今年から六十にはしが出たといふ主
人の藤兵衛に、その家内のお袖といふしやんとした婆
さんの二人ざり。娘は當町で可なりの呉服商に嫁して
居て、布哇に出稼ぎに往つて居る俵のところからは毎
月の送金がある。それを一文も手をつけずに預けて置
いて、二人は二棟の長家から上る屋賃と、其肥料代で
充分に暮してゆかれるといふ、至つて内福な家であ
つた。

極く早起きな爺さんで、さらさら軒に音ある雪
の朝など、目覚めても起るのが辛さに猶仰向けになつ
て居ると、階下では定つてごほんくと咳入る音して
「婆さんく」と呼び起して居る。私が手拭と楊子を持
つて降りてゆく頃は、昔の目あかし頭巾を切つて縫つ
て浅くした茶色の帽子に、チルの襟巻をスポリとかけ
て「豪い大雪になりました、はいく」など、鐵色の寢
ン寢着や前掛に附着いた雪を拂つて居る。井戸端まで
の道はもう整然とつけられてある。

先入主となつた思想を脱くことが出来ないで、憎い
と思つた人は何處までも惡み、はじめ善いと思つた人
の爲ることならまた、何でも彼でも善意に解してしまふ
といふ性質で、すべてが自慢好きな、煽動てられて喜
んで居る人の善い爺さんだつた。
お婆さんはなかく口の八釜しい、併し口ほど腹は
惡くない人で、何でも爺さんの云ふことに反抗て見
るのが癖だつたが、それも何處までも然うといふので
はなく、大聲にでも怒鳴られると、其まゝもやくくと
同意してしまふといふ風だつた。
長家は一棟を五軒に仕切つて、都合十軒になつて居
たさうだ。借家人の多くは煙草職人や日雇ひのやうな

其日稼ぎの者で、月末になる
とお爺さん自らが催促に出掛
けて行く。「皆どうも狡猾くて
足を運ばせてばかり居て困
る」と口癖のやうに言つて居
た。時たま夕暮れになど、青
い顔の女が腰をひくくして入
つて来て、上り框に白銅や銅
貨の幾何を並べて、何やらく
どくどと言ひ譯らしいことを
言つて居るのを見たことがあ
るが、憚んな時にお婆さんは
いつも臺所で銅の音をカチカ
チさせながら、頻りに物價騰
貴の折からを口にして、「……
全くさう溜められちや堪んね
からない。今一月分入金たと
ころで、あともう二月分も溜
つて居るんだぞい。せいしく
骨折つて入金で貰あななくちや
あ仕様がなから……」な



ど、小言を云つて居る。椽
側にはお爺さんが硯を持ち
出して、大きな球の眼鏡を
かけて、ひどく筆の先を握
つて覺帳に書き入れて居る
。或る日曜の午後だつた。
お茶が淹つたからと招かれ
て、階下の長火鉢の前で柿
餅を焼くお婆さんの手許を
見ながら、一寸賞めた鉢の
木から、話しは盆栽のこと
に遷つて、其長いのに困つ
て居たところへ、格子戸を
あけて一人の男が入つて來
た。廣い額に一寸くぼみの
ある目のぎよるとした男
で、薄汚い縞の筒袖の羽織
を着て居た。私は直ぐに二
階に上つて格別氣にもとめ
なかつたが、暫く経つてか
ら一寸月があつて降りて來

た時、じろりと私を見た其目が何となく氣味悪く思はれたつた、言葉の様子では奥のものらしく、感心して見入つて居るお爺さんの手の、一葉の寫眞を煙管の頭で指し示しながら、稍々せつこみ氣味の調子でこんなことを言つて居た。

「……へえ其處んところが其齒車仕掛けになつて居るのでして、此處からかう葉を入ると、それそのの鉋丁見たいのがかう落ちて来てそれを刻むやうになつて居るのですな。まだ完全にはまゐりませんが遠からず……へえ其處が葉の落ちて溜るところ……其齒車のところを今少し、今工夫中なんですがな、當町の田中様なども大層お賛成下さいます、お忙しいところをわざわざお光來下さりませう、なんしても此町から其様な發明が出るのは殊に名譽だからと仰言つて、他日それが完成の曉には是非とも專賣——といふやうに取り計らはうからな、へえいかいご盡力下さいます。兎も角も世に紹介してやるからと仰言つて、二三日前お知り合の新聞屋さんに頼んで下さりませ、へえ……」

それから暫く經つて男が歸つたあと、階下では何やら大聲に言い争つて居たが、やがてお爺さんは何處かとてもするやうに凝乎と見て居る。したがまた「よしや出來上つたところで一臺幾何つて大分費るさうなんですから、高が貴女、桑切る器械一つに五兩の十兩のつて出す馬鹿が何處の國にありや、ほんに馬鹿馬鹿しい話なんてつさ」とさんくんに罵りつて降りて往つた。

それから二月程過ぎたが、二人は時々いつも其事ではかり衝突して居た。同じ長家に長さんといふ、片眼の男が住んで居た。親の代から此處に居て洋傘の張替へを業として居たさうだが、至て世話好きな男で、字も可なりに見えるところから、何かと常に長家中の世話を焼いて、大家の方でも借家人の選擇は長さんに委して置くといふ位、なかくの勢力があつた。此男がまた大へんに隣家の男を憎んで、屋賃を屈けに來た折はよく其讒訴を語つて居た。非常な煙草好きで、お婆さんの置いた長煙管を引きよせながら、「なに、しても隣家の先生は大金持になりやせう、常に普通なことしては金が残んねなんて言つてる位だから、ハ、ハ、ハ、子育て桑の柔いやつを、ぎし／＼器械で揉まれて堪るもんですかい、甘い油が皆奪れつちまはあね、彼奴夢い見てんだから……」などとせゝら笑つて居た。

へ出掛けていつた様子、間もなくお婆さんが二階へ上つて來た如何したことかと聞いて見ると「何ね貴女、家のお爺さんにも困つちまひやすよ、あんな香具師のいふことなんて本氣にしてるのだから……あれは貴女長家の者なんてつさい、去年の秋から貸しとくのです、夫婦二人で子供はなし、あらく都合がよくつて貴女、新しい疊は敷く立派な時計はかざる、一頻りはほんに大臣どんのやうな暮しをして居やしたが、さうして何にも爲すに贅澤語つて居るうちにすつかり喰つちまつてあととはまたもとの木阿彌でつさ、なんでも何とかの器械を賣る手先を遣つて、其代價を着服つちまづたんだなんていふやうな話でしたつけ。すると今度は貴女、桑切る器械を發明するんだつて氣違ひのやうになつて騒いでるんでつさい、お蔭で屋賃はもう二圓幾らつて溜つてるんでつさい、それを家のお爺さんたら宜い氣になつて彼奴の口車に乗つて出來上つたら大したもんだなんて言つてるんでつさい、他の者の爲めになりやせんわ！」一息に辨じたて、さて一寸口を噤んだが「ねえ貴女、あんな顔して、發明なんか出來やせうか？」それでも幾分か、若しやといつたやうな氣持ちでもあるか「さあ」と行き迫つた私の顔を讀まう

お爺さんはまたそれを、あの男は他の借家人のやうに長さんに首を下げないからだと言つて居た。月日は用捨なく經つて農家は忙しい養蠶時となつた町役場の旗竿に、天氣豫報の旗が赤や白と毎日取り替へられて、春蠶は二度の眠りを起きたが、桑切り器械はまだ完成しなかつた。

私は其翌月今の學校に轉任となつた。取材が新しいのが何より嬉しい。それに、觀察が正しく、描寫も好い、描かんと欲する所が可なり描けて居る。老爺や老婆、さては發明家や長さんの性格も能く出て居るし、其周圍——田舎の些つと有福な老人夫婦の生活の様が、目に見えるやうだ。一人稱になつて居る作者の態度がすつきりして居る。餘程なれた書方である。(評)

三等 歸路

松山市二番 草村 瑩子 町富田方

燈が美しく點いて、人はみな醉えるが如くゆく。曇つた夜だ。自分もふらくとあるいた。何となく物足らぬ心地がする。夕食はまだくはぬ。どこかの縁日でもあらう、人通りがいつになく多い。曇つてはゐるが、空にはほのかに明るみをもつて橋際のアーチ燈が、紫白く、息づくやうに、暗らくなつては又明るくなる。